みゆきの里ニュース

恒例の、みゆきの里夏祭りを開催しました

年に一度のお楽しみ、今年で３１回目を数える恒例の「みゆきの里夏祭り」を８月１日木曜日に開催。職員と入所者の皆さま、そして近隣地域の皆さまにも多数ご来場いただき、みんなで一緒に夏の夜を満喫しました。

祭りのステージは、笛田神社巫女舞・御幸保育園の和太鼓演奏で幕開け。リズム幼稚園、こばと保育園のちびっこが元気いっぱいにソーラン節を披露したあと、地域の皆さまと職員が一緒に盆踊り、親睦の輪を広げました。

ロアッソ熊本の選手も参加

また今年はスペシャルゲストとして、プロサッカーチーム・ロアッソ熊本からディフェンダーの衛藤 幹弥選手、ゴールキーパーの内山 圭選手と、チームのマッスルアンバサダー・スガッシュさんも参加。リフティング大会では華麗な足技を披露し、大いに会場を盛り上げました。

会場にはソフトクリームや焼きとうもろこし、かき氷などのお祭りグルメや、射的、スーパーボールなどの出店も並び、祭りムードは最高潮！夏の暑さを忘れて楽しいひとときを過ごしていました。

左から、スガッシュさん、衛藤 幹弥選手、内山 圭選手

大腸内視鏡検査を始めました

当院では内視鏡の専門医が、最新の検査機器を使い、検査・診断しています。 血便がある、下痢が多い、よく便秘になる、便が細くなったなどの症状がある方は内視鏡検査をお勧めしています。

【担当医師】倉本 正文（消化器内視鏡学会専門医、
消化器外科学会専門医・指導医、消化器がん外科治療認定医）

- ◆ 検査曜日　　：月・火・水・金
- ◆ お持ち頂く物：保険証
- ◆ 予約・問合せ　：096-378-1166（担当：徳永）
  検査は「予約制」ですので、事前予約をお願いします。

～医療の輪で、健康と命の尊厳を支えます～　医療法人博光会 御幸病院

日本医療機能評価機構 認定第 JCBB 号

【診療科目】内科・循環器内科・消化器内科・呼吸器内科・整形リハビリテーション科・リハビリテーション科・神経内科・腎臓内科・緩和ケア内科・漢方内科・心療内科・アレルギー疾患内科

【診療受付時間】平日 午前８時 30 分～午後５時　※但し急患は何時でも受け付けます。

【施設概要】
- ● 一般病棟 30床（LTAC４床、地域包括ケア病床10床含む）
- ● 回復期リハビリテーション病棟 60床
- ● 医療療養病棟 29床　● 地域包括ケア病棟 47床　● 緩和ケア病棟 20床　計186床
- ● 訪問看護ステーション「みゆきの里」御幸病院訪問介護事業所

みゆきの里グループ
みゆきの里 総合相談支援センター
みゆきの里 在宅総合支援センター

医療法人　博光会
医療法人 博光会　御幸病院
介護老人保健施設　ぼたん園
サービス付高齢者向け住宅　サンシティハウス
医療法人 博光会　みゆき天明クリニック

社会福祉法人　健成会
軽費老人ホーム 富貴苑
ケアハウス ピオニーガーデン
ウェルネススクエアー 和楽
特別養護老人ホーム みゆき園
地域密着型特別養護老人ホーム みゆき東館
小規模多機能ハウス ほがらか
グループホーム ほがらか

関連法人
株式会社 みゆきの里 健康ファーム
株式会社 笑健

発行／医療法人博光会 御幸病院　〒861-4172 熊本市南区御幸笛田6-7-40　TEL：096-378-1166　FAX：096-378-1762　メールアドレス info@miyukinosato.or.jp

御幸病院広報誌

みゆきの里通信

特集 ▌地域との医療連携

2019 AUTUMN
vol.39

地域と力を合わせて、
多様な医療の提供、ケアニーズに応える

人が人をおもう。
人が人をつつむ。
みゆきの里

健康経営に取り組み さらにより良い医療、介護をご提供

医療法人博光会　理事長 / みゆきの里　会長
富島 三貴

日頃より当法人の運営にあたりましては、ご支援、ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

10月12日から13日にかけて北日本から東日本の太平洋側を中心に、広い範囲で猛威を振るった台風19号の被害はかつてないほどの甚大な規模となりました。被害を受けられた皆様方には心からお見舞い申し上げます。

さて、医療に対するニーズが多種多様化する中、一人一人の患者様に応じた適切な診療を持続的にご提供するためには「地域医療連携」を確実に進めていくことが求められています。私たちみゆきの里では、「地域医療連携センター」を軸に、地域の開業医・クリニックの先生方と役割を分担し、一人ひとりの患者様に対しての治療、療養・リハビリ等を適切にご提供する連携体制を整えています。

治療や療養の過程で生じる様々な問題について、医療ソーシャルワーカーが患者様・ご家族様と一緒に解決方法を考え、安心して治療や療養に専念して頂けるようお手伝いするほか、当院での治療を終えられた後も、地域で安心して暮らしていけるように退院支援を行うなど、入院前、退院後の両面から支援、地域全体での患者様へのサポートをこれまで以上に強く進めて参ります。

そして、より良い医療、介護サービスを皆さまにご提供するためには、まず職員・スタッフが健康であることが必要です。そこで私たちは「健康経営」に取り組むことといたしました。職員が抱える健康課題解消の支援、ストレスチエックや喫煙率などから健康状態を分析するなど健康推進室と統合医療センターが一丸となって職員の健康支援を推進、健康経営優良法人の取得を目指します。この取り組みは、今年6期目を終えた地域住民へ向けての「みゆきHolistic Lifeプロモーション(MHLP)講座」を自ら実践することに他なりません。この講座では健康づくりを通して、自助力、互助力、地域づくり力を高めることで、災害に強いまちづくりの一翼を担おうとするものです。今後とも、皆さまの心身両面での健康を増進させ、命と健康を支えられるよう、精一杯努めてまいります。

患者ファーストのための 医療・福祉連携を

看護部長
小嶋　紀子

令和元年7月16日付で看護部長に就任致しました、小嶋と申します。

1年半の充電期間を経て、昨年、御幸病院とのご縁を頂戴しました。39年にわたる看護師としてのキャリアの大部分を急性期病院で過ごした私にとって、入職後の半年間、人事センターでみゆきの里全体を俯瞰できる経験を得られたことは、医療福祉連携の現場を知る上でたいへん有意義でした。

患者様のベッドサイドに一番近いのは看護師ですが、多職種がそれぞれの専門性を活かしながら、パッチワークのように緻密な調和をつくり出せてこそ、患者様とご家族に寄り添うことができるのだと思います。大切なのは、“どうすることが患者様にとって一番いいのか”を常に考えること。そのための私の役割は、病院の中にとどまらず、みゆきの里全体の交流を深め、お互いの理解に基づいた連携と協働に貢献することです。

また、看護師一人ひとりが人として充実し、自信とゆとりを持って働けるよう、現場の生の声を大切にしたいと考えています。職員が“ずっと働き続けたい”と思える職場環境づくりがより良い看護につながり、ひいては患者様の幸福度を高めていくことになると信じています。

特集 地域との医療連携

地域医療連携センターで 入退院を一元管理、 迅速で満足度の高い支援を目指して

当院では、地域医療連携センターを窓口として病床管理を集約することで、済生会熊本病院などの高度急性期病院や、地域のクリニックからの患者受け入れが円滑に行えるように対応しています。病床管理担当看護師がキーマンとなって、病院や施設、一般家庭などからの入転院相談や入院受け入れ(前方支援)を実施し、適正かつ効率的なベッドコントロールを行います。また、転棟・退院調整(後方支援)にあたっては、センターと情報を共有した医療ソーシャルワーカーが、ご本人やご家族の支援を担当。安心して治療やリハビリに専念していただけるよう、介護サービスや福祉サービスのご利用について相談に応じており、施設やかかりつけ医とも綿密にコミュニケーションをとりながら、継続治療やリハビリの必要な方には、転院先や施設のご紹介を行っています。

地域の医療機関とのスピーディーで緊密な連携によって、ケースごとに、より高度な入退院管理に取り組むことが求められるのが地域医療連携センターです。みゆきの里の地域包括ケアシステムという汎用性の高い受け入れ態勢を活かしながら、多様なニーズに合った医療とケアの提供につなげてまいります。

地域医療連携センター長　副院長
木村 浩

すべての入退院を“見える化”
一人ひとりに適したより良い治療と療養を

病床情報の中央化により入退院管理を円滑に

地域医療連携センターは、地域からの入転院受け入れの円滑化と、入退院時の患者様の支援強化のため、入退院管理を一元化した窓口です。電子データにより、全ての入退院状況及び病床状況は見える化され、それぞれの入院目的や病状、在院日数などに応じた効率的な転棟・退院が図られています。

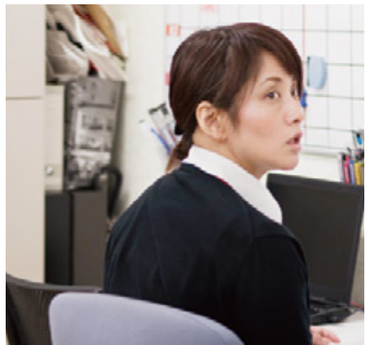
その調整及び運営は連携センターに一任されており、看護部主催による朝のブリーフィングミーティングや毎週、定例開催している病床管理ミーティングにおいて、連携センター看護師をはじめ、みゆきの里内各施設の相談員や多職種の職員が集合し、ベッドコントロールに関する問題点や情報交換を行っています。

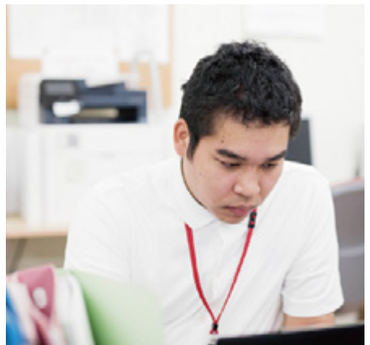
入転院受け入れ（前方支援）の中心となるのは、私たち専任看護師です。急性期病院やクリニック、施設などから相談を受けると、情報を精査し、判定医と協議の上、治療やリハビリの必要性を考えながら、先方と病棟の看護師長とともに綿密な入院調整を行います。依頼を受けてから2日以内の返答を標榜し、スピーディーな“断らない医療”の実践に向け、日々、病床状況の把握と多職種による情報共有に努め、最適なベッドコントロールを心がけています。

治療や療養の過程で生じる様々な問題を一緒に考えながら

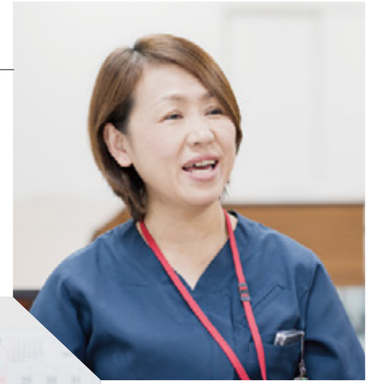
転棟・退院調整（後方支援）の中心的役割を担うのは、医療ソーシャルワーカーです。当院への入転院相談には、実に様々なケースがあります。急性期病院での手術後、体力の低下によりリハビリ目的で入院を希望される場合は、在宅診療に向けてのサポートを考えることも重要です。また、施設の入所者の医療ニーズが高まって入院となる場合、病状の評価によって積極治療を行わない判断であれば、看取りのための在宅診療や、他の有料老人ホームへの訪問診療も行います。さらに、精神疾患のある方の緩和ケアでは、精神科への往診を行いながら、痛みに対する投薬とともに予後の判定を行い、緩和ケア病棟での安らかな最期を目標に、入院の時期を探るケースもあります。

地域医療連携センターでは、当院での治療を終えられた後も、一人ひとりが最適な治療や療養を継続できるよう、医療ソーシャルワーカーを中心に、医師、看護師、訪問看護師、理学療法士など多職種が関わります。また、積極医療を望まないケースの増加を受け、看取りのためのトリアージの中核的役割を担っており、QOLやQODを見極めながら、適材適所の選定を行っています。介護が困難になったご家族のために、医療依存度の高い方を一時的に受け入れるレスパイト入院にも力を入れています。ご本人と家族にとって、最も望ましい形は何か。これからも、多様な視点を持つことで、個別に生じる色々な問題を一緒に解決し、病気や障がいがあっても安心して地域で暮らしていけるよう取り組んでいきます。





地域医療連携センター
主任　松本美代子



常にベッドの稼働状況を把握し、圧迫骨折や事故による外傷などの亜急性の入院や緊急入院にも随時対応。患者様とご家族のニーズを第一に、迅速でスムーズな入転院をお手伝いします。ご転院に対して不安がないように、事前訪問により患者様やご家族のご要望をお聞きし、現場と連携して入院前から支援を開始するケースもあります。また退院後は、紹介先へソーシャルワーカーが訪問し、退院調整の評価を行うこともあります。

地域医療連携センター 兼
総合相談支援センター
主任　有水誠紀

地域との連携の流れ

急性期病院
クリニック、施設

↕ 連携

看護師による
前方支援（入院）
◎医師、看護師、薬剤師、リハビリ
その他多職種との協議
◎相談、事前訪問、主治医情報共有
病床調整・管理、稼働状況把握
スピーディな受入、断らない医療

御幸病院
地域医療連携センター
緩和ケア病棟

↕ 連携

ソーシャルワーカーによる
後方支援（退院）
◎みゆきの里の内外に限らず、
適切な居場所へ（住み慣れた所）
◎退院調整、ご家族と相談
クリニックや施設への説明
選択肢が多いので安心

【 訪問診療、看護、介護、リハビリ、療養 】

みゆきの里関連施設
◎ 在宅総合支援センター
◎ ぼたん園
◎ サンシティハウス
◎ みゆき園
◎ ピオニーガーデン
◎ 富貴苑

地域の施設
◎ 病院（療養型）
◎ 病院（精神科）
◎ 施設、老人ホーム

在宅

訪問診療・緩和ケア

自分らしく
安らかな最期のために
在宅診療という選択肢

緩和ケア外来の役割は、急性期病院やかかりつけ医、緩和ケア病棟、家庭などと綿密に連携しながら、がんの進行状況や抗がん剤の副作用、疼痛の程度、QOLの変化などに応じて、闘病生活がスムーズにシフトできるようサポートすることです。

訪問診療センター長・緩和ケア診察部副部長
岡村 茂樹

急性期病院と在宅をつなぐ緩和ケア外来

令和元年5月に立ち上げた緩和ケア外来では、現在、10件のケースを扱っています。急性期病院を退院した後のフォローだけでなく、急性期病院の治療と並行して、主に痛みなどの治療を行ったり、緩和ケア病棟から退院して在宅に移行する場合の対応などが、緩和ケア外来の対象。がんが長く付き合う病気となった昨今、診断後の早い時期から関わり、苦痛や精神的ストレスを軽減することで、抵抗力が高まり、予後がよくなることも期待されています。

末期がんでは、積極治療をやめた時点からのリスタートが大きな課題です。目標を見失って喪失感を抱えた患者様や家族に対し、多様な生き方の選択肢を提供し、一緒に考えていくのが私たちの仕事です。家庭に近い環境を整えている緩和ケア病棟であっても、自然な生活の中で安楽な最期を迎えるには、そのアプローチに限界があります。とはいえ、家で看取るということは、家族にとって覚悟が必要です。そんな家族の気持ちに寄り添い、外出や外泊などのステップを踏みながら、バックアップ体制を整えていくことが大切です。

急性期病院の主治医や、付き合いの長いかかりつけ医とのつながりも重要です。信頼関係のある医師との関係が切れることで不安に陥らないよう、2～3ヵ月に1度程度の関わりを保ち、長い目で見ながら伴走する姿勢で、徐々に軸足を移していただく配慮が欠かせません。

家族による看取りをチーム連携で支える

心疾患や神経疾患に関しても、今後は、在宅での対応を充実させていきたいと考えていますが、訪問診療の存在は、まだまだ周知されていません。そのため、ほとんど動けないような状態の方が、家族に伴われてリクライニング車椅子で受診されている姿をよく拝見し、胸が痛みます。重篤な場合も、在宅診療が可能であることを知っていただきたいですし、その人らしい最期を考えるとき、「住み慣れた家で」という選択を尊重できればと思います。

在宅医療を支えるには、多職種で介入していくシステムが理想であり、場合によっては、ケアマネージャーを中心に、介護支援を含めた診療計画を組むことも大切です。個々のニーズに合わせ、医療と福祉双方のスタッフが十分な話し合いを重ねながら、家族と心を一つにして取り組むことで、家で安心して看取ることが可能になっていくのではないかと思います。

地域の「全人的な健康づくり」をサポート

老人福祉センター ウェルネススクエアー和楽 施設長
飯田 俊之

和楽は、「人生100歳時代」の到来を見越して、地域の皆様の健康長寿に貢献するため、2003年に開業しました。施設内には、天然温泉、自然食レストラン、トレーニング室のほか、各種教室や研修会等にご利用いただける貸室も備え、健康を高めるためのサービスをトータルで提供しており、熊本市近郊の幅広い地域の皆様を含め、年間約20万人の方にご利用いただいています。現在、平均寿命と健康寿命の間には約10年ものギャップがあるといわれ、団塊の世代が後期高齢者となる2025年を目前に、健康寿命をいかに伸ばすかが、医療福祉行政の課題となっています。公設民営が一般的な老人福祉センターにあって、全国でも珍しい民設民営の和楽は、健康長寿のまちづくりを標榜するみゆきの里の一員として、地域を元気にするための拠点となることを目指しています。これからも皆様の真の健康を願って、身体(body)だけでなく、心(mind)と精神(spirit)も含めた全人的な健康づくりのサポートに努めてまいります。多くの皆さまのご利用を心よりお待ちしています。

「身土不二」の自然食レストラン

身体と環境は一体である(身土不二)という理念のもと、季節の恵みを大切にしたレストランでは、安心安全で体にやさしい料理を、バイキング方式で提供しています。

自然食レストラン

心と体を癒す天然温泉

身体機能を高める歩行浴や、音の振動によって体の不調を改善するサイマティックセラピーを取り入れた、開放的で心地よい天然温泉です。

天然温泉

運動型通所サービス

介護保険の適用となる日常生活支援総合事業として「運動型通所サービス」を実施しており、要支援認定を受けられた方の身体機能回復・向上のお手伝いにも取り組んでいます。

健康づくりのための各種講座

地域の健康づくりを担う人材育成を目指した「みゆきHolistic Life プロモーション」講座をはじめ、「心を癒す」「身体を動かす」「食を楽しむ」「感性を磨く」ことをテーマに、アンチエイジングや食養生などの各種講座を開催しています。

運動型通所サービス